
ショートショートすと〜り〜ず【恋】

水瀬愁

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ショートショートすと〜り〜ず【恋】

【Nコード】

N3766C

【作者名】

水瀬愁

恋】

【あらすじ】

子供の頃の僕は意地っ張りで、幼馴染の彼女のが好きなのに素直になれなくて。でも、彼女は僕の恋人になってくれた。何度目かになるデート。待ち合わせしたのに、君は来なくて。降り出した雨の中、公園で待つ僕はブランコに触れて……

ショートショートすと〜り〜ず【

(前書き)

ショートショートすと〜り〜ず【待】の逆バージョン

ショートショートすと〜り〜ず【恋】

I love only you . I want to love only you . I continue loving it simply because it is you . Because you love me .

雨が降り出した。

傘を持ってこなかったことが悔やまれる。

先ほどまで子供たちがはしゃぎあい、母親たちがおしゃべりをしていた砂場にも、誰もいない。

それでも、僕がここを離れるわけには行かなかった。

「遅いなあいつ……」

せっかく　せっかく、小遣いが入ったのに。

今まであいつの我侭聞いてやれなかったから、努力したのに。

全部使うつもりで　彼女をデートに誘ったのに。

悲しくはならないけど、少しもやもやとする。

そう　きつと、この雨のせいだ。

僕の身体を打っていく無数の雨粒。

近くのブランコからは衝突音が連打に近い速さで聞こえてきて。

なぜかとてもむなしくなり、心細くなり　時間の流れを忘れて

しまう。

やっぱり、僕はまだ子供か。

思わず自嘲的な笑いを浮かべてしまう。

「ある日のこと、ここで遊んでいた子供が二人いました」

そのうちの一人は泣き虫な、それでもやんちゃな男の子。

もう一人は、男の子の抑制係ともいえる落ち着いた女の子。

二人は反発しあいながらも、いつもいっしょでした。

女の子がどうだったかはわかりませんが、男の子は、女の子のことが好きだったからです。

そして今日も、男の子は女の子に反発しながらも、女の子の手を握っていたのでした。

男の子はブランコを勧め、女の子を先に座らせました。

ふたつあるブランコ。ひとつは今にも壊れそうで、ざらざらとした感触が少し痛いもの。もうひとつは新品で、つるつるとした心地よいもの。

男の子は壊れそうなブランコの前に立ち、女の子を新品のブランコへと座らせたのでした。

小さな、小さな優しさ。

それに気づいた女の子は、とても暖かい笑みを浮かべました。好きなのに、大好きなのに、それでも素直になれなくて。

男の子はがむしゃらにブランコを乗り回し始めました。そのときです。

ブランコの板がメキメキという音をたてて壊れ始め、男の子が勢い良く地面へと振り落とされたのは。

男の子の目には、真つ暗な暗闇しか映らなくなってしまいました。男の子の身体は動かなくて、男の子の心は動かなくて。

女の子の叫びに言葉を返すことも、女の子の涙を拭くこともできなくて。

誰かが駆け寄ってくる足音を聞きながら、ゆっくりゆっくりと意識を落としていった男の子。

「結局、ただの捻挫だったんだけどな……」

僕の手はいつの間にかブランコを掴んでいて。

錆びている金属の鎖が、金切り声のような音をたてて軋んだ。

ブランコの上へ、雨粒以外の雨が流れるのを止められなかった。

あの頃の自分は馬鹿で、あの頃の自分は女の子が隣にいてくれることを当たり前だと思っ

今。今の僕は馬鹿者で、今の自分は現実の痛みを噛み締めていて。

ずっと、なんてことはありえない。知ってるからこそ、むなし。彼女には彼女の生きる道があつて、そこに僕が居ることも居ないこともあつて。

そのむなしさが、強く僕の心を締め付ける。

「ねえねえ、何で泣いてるの？」

僕は呆然と音源へと振り返つた。

そこには、前にお気に入りだといつていた服を惜しみなく濡らし
ている 彼女。

呼吸は荒れていて、胸に手を当てて肩を上下させている。

同じ年でもこうは大きくない、豊かな胸に目が行きそうにもなら
なかつた。

彼女が僕の視線に気づき、にっこりと微笑んで、僕の中で時間
もどつてきた。

迷いなくポケットへ手を入れ、ハンカチを取り出すと、彼女の頬
を軽く撫でた。

ハンカチ越しでも、ふくよかでもなく貧相でもない頬の柔らかさ
が伝わってくる。

彼女が目を丸くした。

「い いいよ、拭かなくても！ それに、どうせ濡れちゃうし…」

それでも、ハンカチがびしょぬれになるまで拭いてやる。

ハンカチをポケットへ押し込むと、自分の着ている上着を彼女へ
被せた。

「頭まで被れば濡れないだろ、風邪ひかないようにな」

何かを言いたげな眼差しが俺を突く。

それでも彼女は何も言わず、嬉しそうに笑顔を浮かべた。

その表情が輝かしくて、自然と心が跳ね上がる。

「こんな雨だつたら…今日のデートは中止だね」

「……………そうだな」

雨は降り止みそうになかつた。

彼女は俺を見上げるようにして、瞳を意地悪に細める。

「今さつき、先輩さんに告白されてたんだよ？」

「へえ、どんな先輩？」

「友達がかっこいいって言うてる。でも、タイプじゃなかったなあ」

「どんな子が好みなんだ？」

「……………聞かなくても、わかるよね」

「ああ。ちなみに、俺のタイプもわかってるよな」

彼女を抱き寄せる。

クスクスと笑ってくるのもなぜか癪に障らなくて。

感傷的だからかもしれないけど 彼女がとても愛しく思えてく

る。

あることを思いついて、実行に移すことにした。

「あ！ 今エッチなことしようとしたでしょ？」

なんでわかるんだ。

きゃーきゃーとはやし立てる彼女を無理やり黙らせた。

僕もだまることになるんだけど。

彼女の腕が僕に回り、僕の腕が彼女に回る。

暖かかった。蕩けそうなほどに、暖かかった。

僕の身体と彼女の身体が触れ合う箇所がとても甘美で、思わず彼

女を抱きしめる力が増す。

彼女はそれに答えるように、強く抱きしめ返してくる。

長い長い時間、僕たちはお互いを黙らせあい、自分に素直になっ

た。

寂しいから、余計に愛しい。

自分は大馬鹿者だから、それだけで十分。

世界は哲学的で、良い影響悪い影響でしか物を考えないけど。

世界は変化して、だからこそ永遠はないのだけれど。

それでも 彼女を愛する自分だけは、変えないでいたいと思っ

た。

ショートショートすと〜り〜ず【 恋 】

n t e n s e r a i n f a l l s .
W e m e r e l y m e r e l y k i s s w h i l e i

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3766c/>

ショートショートすと〜り〜ず【 恋 】

2009年3月24日10時12分発行